



研究ノート スラッファとグラムシの友情

著者	松本 有一
雑誌名	経済学論究
巻	72
号	3
ページ	109-136
発行年	2018-12-20
URL	http://hdl.handle.net/10236/00027628

〈研究ノート〉

スラッファとグラムシの友情

The Friendship between Piero Sraffa and Antonio Gramsci

松本 有 一

Piero Sraffa was introduced to Antonio Gramsci by Umberto Cosmo in 1919. Gramsci was one of the leaders of the Italian Communist Party. He was arrested by the fascist police in November 1926 and imprisoned for approximately ten years. Sraffa had supported Gramsci financially and mentally. This paper studies the relationship between them, especially their exchange of opinions on political and economic problems.

Yuichi Matsumoto

JEL : B14, B24, B31

キーワード : スラッファ、グラムシ、イタリア共産党、ファシズム

Keywords : Sraffa, Gramsci, Italian Communist Party, fascism

はじめに

ピエロ・スラッファ (Piero Sraffa) とアントニオ・グラムシ (Antonio Gramsci) の二人のイタリア人の関係について論じることは重い課題である。グラムシに関するイタリア語文献の邦訳は多くあり、スラッファへの言及は少なからずあるが、日本人研究者を含めてグラムシ研究の側から二人の関係だけに論点を絞った議論がどれほどあるのだろうか。スラッファ研究の側から、特に二人の内面の関係 (お互いに思想的にどう及ぼし合ったか) についての考察は多くはないだろう。また、グラムシ研究者には、最近でもスラッファに関して必ずしも正確には知られていないと思われることがある。元々の誤った (正確でない) 情報が正されないまま引き継がれてきたのであろう。

本稿は、グラムシ研究、スラッファ研究のそれぞれの側から論じられてきた研究成果の一部を利用しながら（一部というのは、イタリア語文献で邦訳あるいは英訳がないものには接近し難いという筆者の限界による）、二人の交友関係、特にスラッファのグラムシへの友情がいかほどであったかについて考察しようというものである¹⁾。

二人の出会い

アントニオ・グラムシは 1891 年 1 月 22 日、サルディニア島で生まれた。グラムシ家はアルバニア系ギリシア人の出で、曾祖父がイタリアに亡命して帰化した。1 歳半ころに背中にこぶができ、身障者となった。1903 年に小学校を卒業するが家計困難のため 2 年間登記所で働いた。1905 年から 3 年間中学校に学ぶが、このころ社会主義新聞を読み始めた。1908 年、カリアリの高等学校に入学し、社会主義運動に関係を持った。1911 年、奨学金を得てトリノ大学文学部に入学。言語学に関心を持って研究し、ウンベルト・コズモの講義に出席した。学生時代にアンジェロ・タスカやパルミロ・トリアッティとの交友が始まった。1912 年 10 月頃、社会党トリノ支部に入党し、社会主義運動に参加した。1915 年 9 月にイタリア文学の試験を受けて以降、大学に行かなくなり、結局は学士号を取得しなかったようであった²⁾。

グラムシは 1919 年、タスカ、ウンベルト・テルラチーニ、トリアッティらと週刊『オルディネ・ヌオーヴォ (L'Ordine Nuovo、新秩序)』を発行し (5 月 1 日に創刊号)、編集部書記を務めた。1920 年 12 月 24 日に週刊『オルディネ・ヌオーヴォ』の最終号が出て、1921 年 1 月 1 日に、日刊『オルディネ・ヌオーヴォ』が創刊された。

-
- 1) 固有名詞のカタカナ表記は本稿全体で原則として統一していて、邦訳書からの引用に際して、訳文どおりでないことがある。例えば Sraffa はイタリア語読みではズラッファだが、スラッファで統一している。また、西暦年の漢数字は算用数字にかえている場合がある。
 - 2) グラムシの伝記は多数ある。本稿の準備では主にフィオーリ (1972) と片桐 (2007) を参照した。本稿との関連でのスラッファの経歴に関しては、松本 (1992)、(2017) 参照。フィオーリ (1972、105 頁) によれば、グラムシとトリアッティが最初に出会ったのは、トリノ大学進学のための奨学生試験の会場であった。トリアッティは法学部に入学した。

スラッファは1898年8月5日生まれなので、二人は7歳差である。1916年にスラッファがトリノ大学法学部に入学した時、グラムシはすでに大学を去っていた。二人を引き合わせたのはウンベルト・コズモで、1919年のことだと考えられる³⁾。コズモはスラッファの高校の教師であったが、トリノ大学でも講師をしていた。二人が会ったのは、スラッファが軍務からの休暇中で（スラッファは大学在学中に軍務についていた）、1919年2月初旬から3月のはじめまでの間、あるいは、それよりのちであるなら、9月中ごろより前のあるときとナルディは推測している（Naldi 2000, p.80）。

ナルディの研究によると、いろいろな人の証言から、二人は1920年代の初めころは定期的に会っていたと思われる。スラッファの学友のPaolo Vita-Finziは「友人のピエロ・スラッファの家でグラムシと時々会った」と証言している。『オルディネ・ヌオーヴォ』にかかわっていた若き社会主義者であったAlfonso Leonettiは1978年のスラッファ宛の手紙で、1920年の夏にミラノのスラッファの実家をグラムシとともに訪ねたと述べている。『オルディネ・ヌオーヴォ』の記者だったAndrea Viglonoは、スラッファはしばしば新聞社に来ていて、われわれとくつろいでいたと証言している。（Naldi 2000, p.81）

いずれにしても、二人が1919年に会ってから、『オルディネ・ヌオーヴォ』の編集部などで交流はつづいていたと考えられる。ただ、その後スラッファが経済学の勉強のためロンドンに留学する1921年4月までの間、二人の間でどのような会話が交わされたのか、具体的なことは知られていない。少なくともそのことを伝えた資料、文献などを筆者は知らない。

スラッファは1921年4月から1922年6月まで（途中一時帰国はあるが）ロンドンに滞在し、LSE（London School of Economics）で研究生として学ぶとともに、Labour Research Departmentで調査員をしていた。スラッファはロンドンから『オルディネ・ヌオーヴォ』に、「オープン・ショップ・ドライブ」（1921年7月5日号）、「勤労者に反対する企業側および政府」（1921年7月24日号）、「労働組合幹部」（1921年8月4日号）の3本の記事を送って

3) グラムシは義姉タチャーナへの手紙（1931年2月23日付）のなかで、スラッファをグラムシに紹介したのはコズモであると記している。カプリオリョほか編（1982）第2分冊、172頁。

いる。それらの記事の内容紹介は Potier (1991, pp.21-23)、片桐 (2007、460 頁) などにある。

イタリア共産党結成とグラムシ

1921 年 1 月 21 日、社会党の共産主義分派代表は「イタリア共産党=共産主義インタナショナル (コミンテルン) イタリア支部」結成を決議し、グラムシは中央委員会にはいった。イタリア共産党中央委員になっていたグラムシは、1922 年 6 月にモスクワで開催されたコミンテルン第 2 回拡大執行委員会総会にイタリア代表の一人として派遣された (5 月にモスクワへ)。会議の心労からモスクワ郊外の療養所で数か月療養し、そのままモスクワに滞在し、コミンテルン第 4 回大会 (11 月 5 日から 12 月 5 日) に参加した。グラムシがモスクワに滞在する間、イタリアでは 1922 年 10 月にムッソリーニが政権を掌握し、共産党の指導者が逮捕され、グラムシにも逮捕状が出た。

グラムシが療養中、同じ療養所に入っていたのがエウジェーニヤ・シュフトで、エウジェーニヤを見舞いにしばしば来ていたのが妹のジューリアであった。グラムシはモスクワ滞在中にジューリアと結婚した。シュフト家はローマで暮らしていたことがあり、ジューリアはローマ音楽アカデミー付属高校でヴァイオリンを学んだ。イタリア語で会話ができるということで、シュフト姉妹と親しくなったのであろう。後に獄中のグラムシを支えたのは、二人の姉であるタチャーナ・シュフトで、タチャーナは家族とは離れて、ローマにいた⁴⁾。

グラムシはモスクワに 1923 年 11 月までの一年半滞在したのち、イタリアに帰国すると逮捕されるので、ウィーンに滞在して (1924 年 5 月まで)、党幹部と手紙で通信していた。またグラムシはモスクワ滞在中もスラッフアと文通はあったようだ (片桐 2007、55 頁)。

グラムシはウィーンで何をしていたのか。「ウィーンにおいてグラムシに委

4) 姉妹の両親のシュフト夫妻は、ロシアで反ツァー派として 1884 年にヴォルガ河畔のサマラに流刑になった。シュフトは妻と 6 人の子ども (女 5 人と末の男 1 人) を連れ、フランス、スイスと移動し、1908 年にローマに移った。1913 年秋に、次女のタチャーナだけがローマに残り、一家はロシアに帰り、モスクワ郊外に住んだ。片桐 (2007) 46 頁参照。

ねられた任務は、イタリア共産党と他国共産党との連絡だったが、それ以上に彼は理論的再構築と組織再建の仕事に専念した。とりわけ先にみた第四回大会におけるレーニンとトロツキーの報告に対する熟考だった。そこからグラムシが得たのは、一〇月革命によって開かれた革命の高揚の時期は終わり、それとは異なった革命過程の時代に入ったという確信であり、したがって戦略的に異なった予見、プログラム、主体、装置などを問題にしなければならないという確信だった」（片桐 2007、54 頁）。

このような確信のもと、グラムシはウィーンからトリアッティほかのイタリア共産党指導部と手紙のやり取りで意見交換し、また指示を出していた。さらに『オルディネ・ヌオーヴォ』の第3シリーズを、その大半の記事を準備し、3月1日の第1号から隔週刊でローマで発行した。

「こうしてグラムシは、ロシア的な東方とは異なった西方の革命方式を説いたレーニンとトロツキーの主張を、自分の言葉でいいかえるようになっていった。しかもそこからさらに前進するにあたってヒントを得たのが、スラッフアからの手紙である。モスクワ滞在中も非党員のスラッフアと文通していたが、グラムシがウィーンからスラッフアに『労働者・農民の共和国』というスローガンについての意見を求めたところ、彼から極度に悲観的な返事を受け取った」（片桐 2007、54 - 55 頁）。

グラムシはスラッフアからの手紙の文面とスラッフアの意見へのコメントを付して「今日と明日の諸問題」の表題のもと、『オルディネ・ヌオーヴォ』第3・4号（1924年4月1 - 15日）に掲載した。『オルディネ・ヌオーヴォ』の記事では「友人S」として、匿名にされているが、グラムシが1924年3月21日付でトリアッティほか宛てた手紙で、スラッフアの名前を明記し、スラッフアの手紙の、記事では省略された内容にふれている。

「彼〔スラッフア〕の手紙には、公表されないであろうがきわめて興味ある一節がある。彼は、労働組合問題を論じて、非合法状態と、国家および私的資本家組織による暴力的弾圧の情勢にまさに好適であるアメリカのIWW型に基づいて組合をつくるのが、どうしてわが党によって一度も考えられなかったのかと質問した」（石堂編 1979b、253 頁）。これに対してグラムシは「問題

は、IWW をモデルにすることによって、すこしも解決することはできないであろう」と述べ、労働者の組織編成を論じ、「問題はきわめて重要に思われるので、君たちが共同で詳しくこれを討議し、君たちの判断と、蓋然または可能と君たちがみなす見通しを知らせてほしい。／スラッフアの手紙が私にこのことを考えさせた」（同上、254 - 255 頁。／は改行）と述べている⁵⁾。

スラッフアは先述のように、ロンドン留学時に労働問題について調査し、『オルディネ・ヌオーヴォ』にも寄稿していて、労働組合の組織や運動に関して一定の知識を持っていた。グラムシはこのときスラッフアの意見を受け入れなかったが、問題を考える契機とした。トリアッティらに送った手紙では、グラムシはスラッフアを「マルクス主義者」と呼んでいるが、『オルディネ・ヌオーヴォ』に掲載された批判的コメントでは、彼のイデオロギーは「規範的でカント的であり、マルクス主義的、弁証法的ではない」と断じている。「友人 S」と匿名にしたが、グラムシとスラッフアとの交友関係を官憲に知られているとすれば、一定の配慮をしたのかも知れない。

『オルディネ・ヌオーヴォ』に掲載された記事「今日と明日の諸問題」⁶⁾の「今日」は文字通りであるが、「明日」はファシスト体制の崩壊後を意味している。スラッフアの要点は、ファシスト体制に対して、共産党がなしていない労働者の組織化と諸派との連携、社会主義革命に先立つブルジョア革命の必要性であった。

スラッフアの主張に対してグラムシの反応は否定的で、スラッフアの示唆は党の解体につながるとして拒否したが、「にもかかわらず、スラッフアの手紙が、おそらく二人の友人の間の内省的討論ののちに公表されたというまさにその事實は、それが提起した問題と若き経済学者が示唆した政治的見解の重要性の認識を示したに等しい」、そして「このエピソードはグラムシの政治的思考の発展にスラッフアが何らかの役割を示唆する」とロンカッリアは評価してい

5) IWW は世界産業別労働者組合 (Industrial Workers of the World) で、1905 年に結成されたアメリカで最初の産業別労働組合の連合体である。アナルコ・サンジカリストの指導部により戦闘的なストライキ闘争などを行った。

6) この記事全文の邦訳は石堂編 (1979b) にあり、Naldi (2000) に英訳がある。1924 年 3 月 21 日付のグラムシの手紙の邦訳は石堂編 (1979a) に収録されている。

る (Roncaglia 2009, p. 7)。

グラムシの帰国

グラムシは1924年4月の総選挙で下院議員に選出され、不逮捕特権を得て、5月にようやく帰国した。だが、1926年11月8日、グラムシは逮捕された。

他方スラッフアは1921年4月から1922年6月のロンドン留学中にJ. M. ケインズの知己を得ることができ、イタリアの銀行問題についての論説を依頼された。論説の一つが、ケインズが責任編集をしていた『マンチェスター・ガーディアン・コマーシャル』紙の特別号「ヨーロッパにおける再興」シリーズの第11号(1922年12月7日)に掲載された「今日のイタリアの銀行業 Italian Banking To-day」であった。首相のムッソリーニは、スラッフアの父親のアンジェロ・スラッフアに電報を送り、この論説はイタリアの金融に関して悲観的な印象を与えるとして、それを払拭させる論説を息子に書かせるよう求めたが、アンジェロは、公になっている数字や事実を単に述べているだけだとしてそれを拒否した。この問題を受けてケインズはスラッフアに英国に来よう勧め、スラッフアはそれに従ったが、ファシスト政府が英国政府にスラッフアを要注意人物だと通告したため、1923年1月、英国への入国ができなかった。ケインズの尽力もあり、要注意人物リストから削除され英国への入国が可能になったのは、1924年になってからであった。

獄中のグラムシへのスラッフアの支援

逮捕されたグラムシは、イタリア南部のシチリア島の北方にある小島のウスティカに流刑となり、ローマからウスティカまで19日間かけて移送され、12月7日に着いた。そしてミラノに移送される1927年1月20日までそこにいた。ウスティカのグラムシは、家族などに状況を知らせたが、1926年12月11日付でスラッフアにも手紙を送り、次のように依頼した。

… きみにお願いしたいのですが、なにか本を送ってできませんか。学習用の経済と金融のすぐれた概説書がほしいのです。きみがよいと思う、基

礎的な本で結構です。それから、もしできれば、私に興味をもてそうな一般教養の本を送ってください。親しい友よ、きみは私の家族の状態もわかっているし、個人的な友人以外から本を送ってもらうのが私にとってどんなに困難かも知っていてくれます。…

(カプリオッリョほか編 1982、第 1 分冊、29 頁)

12 月 21 日にはスラッフアに対し次のように書いた。

…16 日付のきみの手紙、受け取りました。ところが、きみから連絡のあった本の方はまだ届いていません。きみの申し出には心から感謝します。すでにスパーリング書店に手紙を書いて、かなりの量の注文をしました。…… ウスティカの政治流刑囚は 30 人で、私たちはすでにいくつかの流刑囚グループのために一連の初歩的な一般教養の講座を始めました。…… 私は歴史・文学部門を担当します。このために何冊かの本を注文したのです。…

(同上、40 - 41 頁)

1927 年 1 月 2 日付のスラッフア宛の手紙で次のように知らせた。

… 前々回の手紙で知らせてもらった本と、私が注文した本の最初の包み受け取りました。これでしばらくは読む本が十分あるわけです。きみの深い配慮に感謝します。でもそれを濫用すまいと思います。なにかほしいものがあるときにはいつでも遠慮なくお願いすることにします。…

(同上、43 頁)

スラッフアはグラムシの依頼に応じて、書店を通じて本を送るとともに、グラムシのために書店に口座を開き、好きなだけ発注できるようにした⁷⁾。石堂ほか編 (1989) にアマデーオ・ボルディーガのグラムシへの手紙 5 通が片桐薫

7) 書店からの発送本リスト (スパーリング=クプファー書店、1926 年 12 月 17 日から 1927 年 6 月 27 日まで) が、カプリオッリョほか編 (1982) 第 4 分冊、211 - 218 頁に掲載されている。

訳で収録されている。ボルディーガはイタリア共産党の指導者の一人でグラムシとは路線対立していたが、ウスティカには彼も流刑され、グラムシと共に生活し、他の流刑者のために学習会を行っていた。スラッファから送られた書籍は学習講座で用いられていた。グラムシがミラノに移送されてからも他の流刑者はウスティカに留められた。ボルディーガの手紙はウスティカからミラノのグラムシに送られたものであるが、その中の記述から、グラムシが移送されてからもスラッファが流刑者のために援助をしていたことがわかる。ボルディーガの手紙を公表するにあたって付されたサントウッチの解説によると、ウスティカでのグラムシは、合宿のような雰囲気で一軒の民家で5人の政治上の流刑人と生活した、ということである（石堂ほか編 1989、492頁以下）。

グラムシが逮捕されてから、獄中の彼との面会や手紙による連絡はもっぱら義姉のタチャーナが献身的に担っていた。アルド・ナトーリは「グラムシがタチャーナに書いたところから容易に推測できるのは、ウスティカ滞在の日々から彼はスラッファの背後に党がいることを確信していたということである。…… グラムシが彼に伝えた詳しい消息は彼だけに宛てられたものではなかったと推測しても無謀ではない。スラッファは党との連絡を続けるための直接の通路となっていた」（ナトーリ 1995、12頁）。

グラムシがウスティカにいるとき、スラッファと数度文通をしたが、移送されたミラノで、「スラッファは古い学友ということで、1927年に彼を一度訪ねることに成功した」（同上）。スラッファがグラムシと面会した正確な日付は不明だが、夏ということで、スラッファが7月にロンドンに向けてイタリアを発つ前のことだと考えてよいだろう（1927年夏というのは、カプリオリョほか編（1982）、第4分冊の「アントニオ・グラムシ年譜」による）。

スラッファは1923年11月、ベルギー大学に職を得て、経済学と財政学を講じていたが、1926年3月にはカリアリ大学の正教授となった。その後、スラッファは1927年10月1日付で、ケインブリジ大学経済学講師に就任することになり、講義準備をするためもあり、7月7日にイタリアを立ってロンドンに向かった。その際、パリに立ち寄り、アンジェロ・タスカに会ってグラムシのために何ができるかが話し合われた。タスカから提案され、実行された

のが、『マンチェスター・ガーディアン』紙 1927 年 10 月 24 日号に掲載された投稿の「ファシズムの方法 アントニオ・グラムシの場合 The Methods of Fascism. The Case of Antonio Gramsci」であるという。それはタスカがイタリア語で書き、スラッファが改訂し、モーリス・ドップとともに英訳したものであった。『マンチェスター・ガーディアン』紙への投稿の準備に関して、ポチエは、ミラノのフェルトリネリ財団に所蔵されているスラッファとタスカの当時の手紙に基づいて論じている (Potier 1991, p.28)。Naldi (2000) も同様にフェルトリネリ財団所蔵の手紙を参照していて、両者を合わせて考えると、1927 年 9 月 21 日、タスカからスラッファに、英国でグラムシに対する関心を喚起するため、新聞等でグラムシに関して公表することをやってくれないかと打診してきた。それに応えて、スラッファは 9 月 22 日付でタスカに次のような内容を含む手紙を送った。

手紙は次のような要素を考慮しなければなりません。a) 共産主義は当地の自由主義の風潮では非常に不評です。だからアピールは純粋に感情に訴えるものであるべきで、事柄の政治的側面は控えめにすべきです。英国の自由主義者は、最初に動物の命に感情を顕にします。つぎに人の命に、そして最後に共産主義者の命です。b) 多くの人はすでにファシストの残虐行為を知っています。それゆえ、世論を喚起するには何か特別なものが重要です。われわれの場合、特別なものはわれわれの友人の性格というより彼の身体状態と彼が受けている取り扱いです。⁸⁾

10 月 5 日にタスカからスラッファに投稿用イタリア語テキストが送付され、スラッファはテキストを英語に訳したことを 10 月 15 日に知らせた。ポチエは「テキストの冒頭のセンテンスはスラッファが書いた」と述べている。このようにポチエが述べた理由は明示されていないが、おそらくフェルトリネリ財

8) 引用の冒頭の「手紙」は、英国の新聞に投稿する手紙を指す。スラッファのタスカ宛手紙はイタリアの *Rinascita* のスラッファ生誕 80 年記念特集 (1978 年) に掲載され、その英訳が *New Left Review*, No.112 (Nov. - Dec., 1978) に、英訳からの邦訳が『経済学批判』8 号 (社会評論社、1980 年 6 月) に収録された。*New Left Review* 収録の手紙全文の英訳からの拙訳を本稿末の付録に取めた。

団に所蔵されているタスカが準備したイタリア語テキストには、投稿された書簡の冒頭のセンテンスは存在しないのであろうし、『マンチェスター・ガーディアン』を継続的に読んでいなければ、書くことができない内容である。

掲載された投稿には「イングランドのイタリア人」と署名があり、同号の別の頁に掲載されていた投稿者一覧にスラッファの名前があったため、「イングランドのイタリア人」がスラッファと捉えられると考えたスラッファは、新聞編集長と協議して、同じ投稿日付（10月21日）で「ピエロ・スラッファ」の署名で、別の内容を投稿し、それが10月25日号に掲載された。『マンチェスター・ガーディアン』に掲載された2つの投稿は以下のとおりである（Naldi 2000, pp.112-114 から拙訳）。10月24日号掲載の投稿の邦訳はカプリオッリョほか編（1982）第4分冊の補遺に収録されている。同書では、これはスラッファによるもので、モーリス・ドップが英語訳したと注記されている。冒頭で言及されているショー氏は、バーナード・ショー（George Bernard Shaw, 1865 - 1950）のことで、彼は劇作家でフェビアン社会主義者であった。

「マンチェスター・ガーディアン」1927年10月24日号

ファシズムの方法 アントニオ・グラムシの場合

マンチェスター・ガーディアン編集長殿

拝啓、貴紙コラムで継続的に行われているファシズムの方法に関する討論の見地から、「必然」によって正当化されるショー氏の犯罪カテゴリーのなかにはまず含まれない最近の一事例に関する諸事実を、読者に提示することは、時宜にかなっていると思われます。

アントニオ・グラムシは、イタリア議会の共産党代議士でジャーナリストですが、代議士の不逮捕特権にもかかわらず、1926年11月逮捕され、そして他の野党議員とともに、イタリアの小島のウスティカに流刑されました。グラムシ氏は背骨のひどい湾曲のため常に病弱の状態でありました。ただ知的な活動は——戦争前には大学で言語学の学術研究、戦後はイタリア政治の研究ですが——、暮しの特別な配慮と特別な食事のおかげによって、継続的にできているだけでした。獄中生活の厳格さがや

や緩やかであっても、それゆえ彼の場合、とりわけ厳しいものであろうと思われます。

最初に拘束されて数か月後、グラムシ氏は島からミラノへ移送されました。この旅は極めてゆっくりしたもので、苦痛を伴う扱いで、イタリアの囚人はこのようなやり方であちらからこちらへと移送されるのです。一日中のろのろと進む列車の特別の囚人用車両の小さな独房に閉じ込められて、最後に至るまで、汚い、蚤、虱などが蠢いている地方刑務所の独房に入れるため、途中あちこち—パレルモ、レッジオ・カラブリア、ナポリ、ローマ、フィレンツェ、ボローニャ—で旅が中断させられるのです。彼はミラノで2月初めから予審を待っています。政治犯の食事は、1日当たりたった1ポンドのパンとスープだけです。通常は、これに差し入れや、友人からのお金や刑務所長に預けたお金で官営売店で購入した食料で補うことができます。しかしながら、グラムシ氏の場合このようなことは許されていません。友人からの食料やお金の差し入れのいずれも刑務所当局から邪魔をされ、グラムシ氏に届かないようにされていました。友人が彼に面会することは拒否されてきました。そのような訪問者を彼が受け入れる法律上の完全な権利があるにもかかわらずです。

もともとデリケートな病人であるグラムシ氏は、拘束された時から扱いの厳しさによって極端な衰弱状態におちっていました。屈強な男の健康をも衰弱させるような扱いです。彼が受けている不十分で貧しい食事でさえ消化できず、彼は文字通り半飢餓の状態にあります。彼は何度か刑務所内診療所に移動させられなければなりません。そして彼の健康状態は、口腔を冒されていて、最近の数週間で歯のほとんどを失ってしまうことになりました。それゆえ、粗末な刑務所の食事を口にする力はお一層失われてしまいました。9か月そのような扱いを受けたこの男は、法廷に立つため、いまやローマへのさらなる旅をしなければなりません。そこで、ファシスト体制への組織的な反抗の罪で、長期の収監、おそらく20年か30年の判決を受けるでしょう。敬具

10月21日

イングランドのイタリア人

「マンチェスター・ガーディアン」1927年10月25日号

ファシズムの方法

マンチェスター・ガーディアン編集長殿

拝啓、貴紙のコラムに掲載されたアドラー博士との書簡でショー氏はこう述べています。「ムッソリーニがおこなったことのいくつか、そして彼がおこなうよう迫ったいくつかは、英国労働党がもし権力を持っていれば試みる社会主義の方向に一層進んでいます。人々はまもなくムッソリーニを資本主義との厳しい対立に向かわせるでしょう。」ひとがファシズムをどのように考えようとも、ファシズムの展開とそのプログラムに精通した人は誰でも、これは事実のまったくの思い違いであることを知っています。ショー氏とかれのフェビアン主義の友人が社会主義ということで意味しているものを、ひとは、私有財産と民間企業を、国家による産業の管理運営で置き換えることであるとずっと理解してきました。いまや、ファシスト指導者の声明とかれらの現実の政策はショー氏とはっきりと矛盾します。ローマ進軍の前夜にムッソリーニ氏がおこなった演説で、彼の経済政策を次のように宣言しました。「われわれは国家からすべての経済的付属物を引き離すつもりだ。われわれは、国家鉄道員、国家警察官、国家保険業務員を十分に持ってきた。」そして再度、ことしの4月に発表された労働党の綱領では次のように宣言しています。「協同体国家は、生産分野における私的な主導権を国家の利益におけるもっとも有用な道具として見なしている。」ファシスト政府の行動に関しては、この観点では、国营電話事業の民間企業への譲渡と生命保険の国家独占からの撤廃に言及することだけでよいでしょう。

もちろん、これは純粹に公的な面への言及です。しかし、もし階級の観点からファシズムの結果を見るならば、ショー氏のアナロジーは相変わらず、なおばかげたものです。敬具

10月21日

ピエロ・スラッフア

片桐薫氏は、これらの投稿は、「ムッソリーニがとっている諸政策を社会主

義的性格と述べている著名な劇作家 B・ショーが、いかに絶対的誤認に陥っているかをいくつかの説得力あるデータで示した」と評価し、「ともかくこうしてイギリスの一流紙に載ったこの投稿の効果は、すぐにイタリアにはねかえった。あわてた当局は、直接の責任者である予審判事と拘置所長にきつく指示し、監獄医長によるグラムシの健康診断を命じた」という。そしてグラムシは 1927 年 10 月 24 日付で母親にあてた手紙で、「上からの命令で、私の健康診断が行われました。私がそれまでにも苦情を言わなかったと、まるで叱られんばかりでした。予審判事と拘置所長は、私の健康についての人騒がせな報道が外国から入ってくるのは、みな私のせいだと考えたがっていました。私のぐあいが悪いのも、私が故意に病気になりたがっているからだ、と思っているようです」と伝えたということである（片桐 2007、142 頁）。

片桐氏はこの手紙が 1927 年 10 月 24 日付だと記しているが、手紙の原文の参照元は記されていない。ただ、カプリオリョほか編（1982）に 1927 年 10 月 24 日付のグラムシから母親あての手紙が収録されているが、それには片桐が引用している文章はない。手紙の引用の前後の片桐の記述の典拠は、L. Fausti, *Intelletti in dialogo, Antonio Gramsci e Piero Sraffa* (Piccola Editrice, 1998) で、母親あての手紙も同書に収録されていると考えられるが、筆者は同書を参照することはできなかった。また、タスカとスラッフアによる投稿が新聞に掲載されたのが 1927 年 10 月 24 日で、グラムシの手紙の日付も 1927 年 10 月 24 日で同じ日なので、即日グラムシの健康診断が行われたことになる。ところが、カプリオリョほか編（1982）に収録されている 1927 年 11 月 7 日のグラムシから母親への手紙には、「私の健康についても心配には及びません。このことでは外国でばかげた噂が報じられたと聞きましたが、私としては、どこかの『敬虔な』人物がそんな噂をお母さんの耳にまで入れる手段を見つけてほしくないものです（凶報はつねに世界の果てまでも届くというのは、残念ながらほんとうです）。私が知らせることだけを信じてください」と書かれている。

獄中の待遇に関して、ミラノ監獄に移送されてからこの時期までにグラムシがいくつかの手紙で書いていることが真実であれば、外部からの食料品の差し

入れは本人に届いているし、健康に問題はないことになる。ただ、ウスティカからミラノへの2週間を越える移送中（1月20日から2月7日）の状況については、投稿に記載と同様のことが、1927年2月12日の家族へあてた手紙に記されている。

この一件以後、「ファシスト政権は、スラッフアのグラムシとの面会を『無害な学友』の面会とはみなさなくなった。警察当局は彼のイタリア入国に際し詳細な尋問をするだけでなく、その行動を監視・チェックし、その際、彼を「悪名高き共産主義者」とか「著名な危険分子」という表現を使っていた。イタリアの内務大臣はケンブリッジ大学に、彼の行動について定期的な情報を求めた。またロンドンのイタリア領事館は、彼についての情報を検討したが、イギリスでは学者の政治行動は際立ったことは許されず、絶対中立を守ることにしていると本国に伝えた。このような当局の執拗な動きに彼はたじろぐことなく、慎重かつ用心深く行動していたが、かつての友人でパリに亡命して反ファシズム運動をしているロッセリと接触して、あやうく逮捕されそうになったこともあった」（片桐 2007、143 頁。この記述に関する片桐の典拠は、前記の Fausti の著書である）。

スラッフアは1927年7月にロンドンに着いて、10月からの講義「上級価値論」の準備を始めたが（ロンドン・ノート）、現実には10月からの講義には間に合わず、講義は最終的に1年間延期された。ただ、その過程で自身の新たな研究テーマに至り、10月から12月は、求めに応じてイタリアの状況に関する講演などをケインブリッジで行ったが、講義の準備過程で生まれた彼自身の着想の定式化に努めていた。また、これ以降、スラッフアの研究および生活の拠点は終生、ケインブリッジに移るのだが、休暇（クリスマス休暇、イースター休暇、夏季休暇）にはイタリアに帰国（帰省）していて、途中パリのイタリア共産党幹部とグラムシに関する情報交換などをしてきた。獄中のグラムシを直接的に支援したのは彼の義姉のタチャーナ（愛称はターニャ）であったが、スラッフアはタチャーナと密接に連絡をとりあっていた。

ナトーリによると、「ターニャは1928年10月ミラノで初めてスラッフアに会った。クリスマス前にもう一度会った」（ナトーリ 1995、37 頁）。1929年

「8月14日に、グラムシは一連の書物の注文をピエロ（スラッフア）に出すようターニヤに一任する。ターニヤは8月17日にこれを請け合せて、『ラッパロの母親の許に向かうピエロに会いました、彼はあなたから任された仕事を全部やるでしょう』と書く」（ナトーリ 1995、48頁）とあるように、タチャーナを介したスラッフアとグラムシとの間の通信がはじまった。

ウスティカに拘留されていたグラムシはミラノに移送され、そこで予審尋問を受けたのち、ローマに移送され、1928年6月4日、特別裁判所で懲役20年4ヵ月5日の判決を受け、トゥーリ特別監獄に送られ7月19日に到着した。タチャーナも12月にはトゥーリに移り、翌年7月までそこに留まり、グラムシと何度か面会した。（カプリオッリョほか編（1982）第4分冊の「アントニオ・グラムシ年譜」より）

判決がでてから、グラムシは特別診察を受け、慢性尿酸血症が発見され、トゥーリに着いてから、尿酸血症の発作が出たりして、体調は慢性的に悪かった。それでも1929年1月に監房内で執筆する許可を得て、系統的な読書とメモ、覚書き等の執筆をした。「獄中ノート」である（同前「アントニオ・グラムシ年譜」より）。

グラムシは1929年7月14日付でタチャーナに宛てた手紙のなかで、「…ピエロのことを思い出しました。というのは、テルラチーニがわれわれ全員の名でちょうど一年まえに手続きをとったわれわれの裁判の再審請求は受理されたかどうか、そしてその後どうなったかを、破棄院長官である彼のおじをつうじてピエロが知ることができるかどうかを、いずれにしても彼に会って聞いてもらいたいものです」と書いている⁹⁾（カプリオッリョほか編 1982、第2分冊、45頁）。

スラッフアは1928年10月から大学での講義をはじめたが（ケインブリジでの最初の一年間は講義をしなかった）、1930年3月、王立経済学会の事業で

9) 1929年9月、グラムシ救出のための上申書について、タチャーナは弁護士と相談し、またスラッフアもタチャーナに手紙でグラムシに上申書を出させるように促した（レプレ 2000、127 - 128頁）。破棄院長官はマリアーノ・ダメリオで、スラッフアの母の姉妹の夫である。スラッフアは父親を通じてダメリオから助言を得ていた。

ある古典派経済学者のデイヴィド・リカードの著作集の編集者に指名され、ただちにその作業に取り掛かっていた。その編集作業を進めるため、1930年秋学期の有給休職（講義をしない）の許可を大学から得ていた。一方その年の夏、7月末から9月末までモスクワ訪問のためケインブリッジを離れていた。目的のひとつはモーリス・ドップとともにソヴィエトのいくつかの工場を訪問することであったが、グラムシの妻と家族を訪ねた¹⁰⁾。

「…7月末、ピエロ・スラッファはモスクワに発ち、ターニヤは彼を通じて家族に贈るプレゼント（デリオへの自転車か？）をグラムシと相談した」（ナトリー 1995、83頁。デリオはグラムシの息子）。「スラッファはモスクワで度々（グラムシの）家族を訪れた後、九月末に帰ってきていた。はっきりした日付は分からないが、9月末から10月初めの間に、彼はターニヤに会って直接消息を伝えた。ターニヤは10月12日付の手紙でそれをグラムシに知らせた。……スラッファは家族の写真もたくさん持って帰ったが、ターニヤはそれを10月13日の手紙に同封してグラムシに送った」（同上、86頁）。「スラッファがモスクワからの帰路バりに立ち寄って、そこでトリアッティに会った…」（同上、92頁）。

獄中のグラムシの健康状態と精神状態

グラムシは1922年5月から1923年11月までモスクワに滞在し、そのときジューリア・シュフトと知り合い結婚した。グラムシは単身モスクワからウィーンに移動し、1924年5月にイタリアに帰国した。妻のジューリアが息子のデリオ（1924年8月にモスクワで生まれた）を連れてイタリアに来たの

10) スラッファの手帳の画像は現在インターネット上で公開されているが、1930年7月から9月の方で、7月13日から29日までの見開きで5画面分がない。手帳から次のことがわかる。8月2日にミラノを発って、ウィーンを経由して、6日にワルシャワを出て、8日にはブラハにいた。ブラハに立ち寄ったということは、モスクワへ行くには回り道ということになる。モスクワ着の日付は不明だが13日にはシュフト家の人々と会っていたようで、9月24日にモスクワを発っている。したがって、ソヴィエト・ロシアに滞在したのは1か月半ということになる。また、9月28日から10月4日までの一週間分（見開きで2画面）の手帳の画像がないが、10月5日の欄には「Milano（ミラノ）」と記入されている。

は 1925 年の秋で、1926 年 8 月までイタリアにいたが、出産のためモスクワに帰り、次男のジュリアーノが生まれた。グラムシは 1926 年 11 月 8 日に逮捕され、それ以降は妻子と会うことはできなかった。

グラムシは、1928 年 6 月 4 日、ミラノの特別裁判所で 20 年 4 か月 5 日の禁固の判決を受け、トゥーリの刑務所に収監された。その約 3 年後の 1931 年 8 月 23 日、スラッフアはタチャーナへの手紙の中で次のように書いていた。

ニーノの手紙は、彼の健康状態と精神状態に関して、ほんとうに憂慮すべきものです。彼の反対の主張にもかかわらず、弱っているは、まさに彼の意志のほうだと思えるのです（このことは、彼には、言わないでおいてください。）ジューリアについてあなたのいう通りだと思いますし、彼女がイタリアに来ることによって、事態がより良くなるものと信じています。あなたがおっしゃることは、たいへん、道理にあっています。まず、はじめに、イタリアに来るのが時宜に適していることをジューリアに納得させてから、そのあとでのみ、ニーノにそれを伝えるようになさってください。

（石堂ほか編 1989、472 頁。ニーノはグラムシの愛称）

グラムシの健康状態に関して、スラッフアはタチャーナとともに手を尽くしたが、ここでは精神状態に関して、特に知性を保つためにとった二人の連携について取り上げる。

例えば、バダローニは次のように述べている。「グラムシが研究を続けるように仕向けるために、スラッフアからアイデアを受けて、両者の間の仲介者になるのがターニャである。スラッフアと彼女の秘密の「陰謀」は、アントニオを知的にせきたてて彼が獄中での無気力な時間にうちかつのを助けるという意図があった。」（石堂ほか編 1989、453 頁）

グラムシはタチャーナからの手紙の内容から、このような二人の意図に気づいていた。1931 年 9 月 7 日のタチャーナへの手紙で次のように述べている。

8 月 28 日付のあなたの手紙で『イタリア知識人』についての私の研究にふれていますが、それにすこし答えることにしたいと思います。あなた

がピエーロと話したらしいことがわかります。彼からでなければ聞けなかったはずのことがありますからね。

(カプリオッリョほか編 1982、第3分冊、25頁)

知識人について私がおこなった研究は、構想としては大がかりなものであり、この論題についての本は実際イタリアにはないと思います。…そもそも私は、知識人という概念をずっと広げ、大知識人にだけ当てはめられる従来の観念に限定しないのです。

(同上、26頁)

近いうちにまたべつの手紙で、ダンテの『地獄篇』第一〇歌についても試論の主題を要約して、その見取図をコズモ教授のもとへ届けてもらいたいと思います。

(同上、28頁)

グラムシが獄中で読書し、資料を読み、思索を重ねた成果は「獄中ノート」として残され、その「獄中ノート」を獄中から運び出し、安全なところに保管し、モスクワの妻のもとに届けることに、スラッファの力があつたことはすでに広く知られていることである。

同じ手紙の中でグラムシはスラッファに関して「彼の経済学の論文はどれも高く評価されていて、専門雑誌で長期にわたる論争を引きおこしていたからです。ピエーロがイギリスの経済学者デーヴィド・リカードの校訂版を準備中だということを、エイナウディ上院議員の論文で読みましたが、エイナウディはこの企画を非常に誉めており、私自身もたいへん喜んでいました」(同上、26頁)と書いていた。

グラムシは獄中の劣悪な状態にあつても思考を止めなかった。それは「獄中ノート」、「獄中からの手紙」を見ればわかる。獄中のグラムシの思考を全面的に支援したのはスラッファであつたが、それは金銭的な面だけではなかつた。一例として、1932年5月30日付でグラムシがタチャーナに宛てた手紙から抜き出してみよう。

……ここで一連の考察を述べてみようと思いますが、もしこの写しを

ピエーロに送るようなときには、文献を指示してくれるよう頼んでください。そうすれば、思考の範囲を広げ、より正しい方向づけをすることも可能になります。リカード独自の経済学の研究方法と彼が方法論的批判に導入した新機軸について、英語で書かれたものでも、なにか専門的な出版物があるかどうか、できれば知りたいものです。…… 私の考察の道筋は次のとおりです。——リカードが経済学史上第一級の人物であることは確かですが、そのほかに哲学史においても意義をもっていたと言えるかどうか？ また、実践の哲学の初期の理論家たちがヘーゲル哲学を超克し、思弁的論理学のあらゆる痕跡を拭い去った彼らの新しい歴史主義を確立するのに、リカードが寄与した、とすることができるか？ ……

…… リカードによって練り上げられた方法論的形態におけるイギリス古典経済学が、新しい理論のその後の発展にどのようにまたどの程度に貢献したかを知ることが問題なのです。…… ピエーロは、リカードの著作の校訂版のための仕事のなかで、この問題についての貴重な資料を集めることができるでしょう。……

(カプリオッリョほか編 1982、第 3 分冊、165 - 167 頁)

これに関してスラッフアは 1932 年 6 月 21 日付でケインブリジからタチャーナに宛てて答えている。レプレ (2000、176 頁) によると、「スラッフアは、対話風に、だがいささか当惑気味に、そして実質的には否定的にこたえている。十分説得的な回答をするためには、まずマルクスとエンゲルスの著作を研究する必要がある (実際は、当の手紙から、彼がマルクスとエンゲルスの著作についてよく知っていることが分かる)。いずれにせよリカードに関するかぎり、グラムシが考えているような影響を与えるだけの哲学的素養はなかったように思われる。リカードは『凡庸な教養の株式仲買人』にすぎない、とスラッフアは書いている」。手紙の全文は Sraffa (1991)、pp.72-75 に収録されている。

ニコラ・バダローニは *Antonio Gramsci, Le sue idee nel nostro tempo* (Editorice l'Unità, 1987) への序文で「本書に発表された、スラッフアの一連の手紙は、少なからぬ問題について互いに影響しあったグラムシと親友ピ

エロ・スラッファとのあいだの知的交流の緊密さを示している」（石堂ほか編 1989、453 頁）。「ピエロ・スラッファとターニャ間の秘密協定はとりわけ、クローチェの『十九世紀におけるヨーロッパの歴史』についての批評を書き上げるよう、グラムシを励ますことを狙いとしている」（同上、454 頁）。

リカードに関して、グラムシはタチャーナを通じてスラッファに意見を求め、スラッファは回答した。その回答についてバダローニは「スラッファは、グラムシの質問の意味を理解していなかった、と言ってよさそうである」（同上、455 頁）と述べているが、そうではなく、グラムシのリカード評価が的外れであると、スラッファはグラムシを直接的に否定しないように気遣ったための文面になったといつてよいだろう¹¹⁾。

グラムシ救出の試み

1933 年 12 月 7 日、グラムシはフォルミアのグズマーノ博士の診療所に拘禁状態のまま入院した。タチャーナは毎週、グラムシのもとを訪れた。1934 年 10 月に仮出獄が認められた。それ以降「時たまタチャーナと一緒に車で外に出た。スラッファは二度訪れ、一緒に長々とおしゃべりさえてきた」（ナトーリ 1995、207 頁）。1935 年 8 月、ローマのクイシサーナ医院にはいり、そこではタチャーナが付き添い、グラムシの弟のカルロがしばしば訪れ、スラッファも面会した（カプリオッリョほか編（1982）第 4 分冊、「アントニオ・グラムシ年譜」）。

スラッファはグラムシを恩赦によって救出することを研究していた。それには法律家であるスラッファの父親や、母の姉妹の夫である破棄院（最高裁に相当）長官のダメリオも協力していた。カプリオッリョほか編（1982）第 4 分冊の「アントニオ・グラムシ年譜」によれば次のようなことがあった。

グラムシはトゥーリの獄内にいた 1933 年 3 月 20 日にウンベルト・アルカンジェリ教授の診察を受けた。「アルカンジェリは特赦申請の必要を指摘するが、グラムシの反対と、タチャーナとスラッファの要請とから、この示唆は診断

11) 獄中のグラムシの思索に対するスラッファの係わりに関しては、それに言及した文献は少なからずあるが、片桐（2006）参照。

書からは除かれる。アルカンジェリは診断書のなかで次のように述べる。『グラムシは現在の条件下では長く生きることは不可能である。私の判断では、彼に仮出獄を認めることができないのであれば、市中の病院か診療所に移すことが必要である』。「アルカンジェリ教授の声明が、『ユマニテ』(5月)と『ソッコルソ・ロッソ』(6月)に発表された。パリで、グラムシおよびファシズム犠牲者釈放のための委員会が結成され、ロマン・ロランとアンリ・バルビュスもこれに参加する。『アツィーオネ・アンティファシスタ』は、6月号のかなりの誌面をグラムシの人間像にあてる。『ジュスティツィア・エ・リベルタ』別冊は、「ファブリツィオ」(U・カロツソ)の署名で、「グラムシと『オルディネ・ヌオーヴォ』」についての論文を発表する(8月)。

このように国際的なグラムシ救出運動があったが、アルカンジェリの診断書の公表がかえってよくなかった。「トリアツィティは誰がこの文書をユマニテ紙の編集局に届けさせたのかを確かめるために調査を命じたが、この調査の結果からは何も分からなかった。スラッフアの方がこの事件のことをずっとよく知っていたのであって、自らグラムシのために条件付き釈放を(あるいは副次的に病院への移送を)獲得するための申請書の文案を作成していた。彼はユマニテ紙における公表が、グラムシの運命について審議を続けていた高位の司法官と政治家の間に、不運にも否定的な影響を与えたことを、父親から聞いて知っていた」(ナトーリ 1995、233 頁)。

この件に関して、レブレ(2000、202 - 203 頁)は「5月9日、イタリア共産党書記局は……『ユマニテ』が診断書に一切触れないよう説得工作を行った。ところが5月11日、フランス共産党機関紙は診断書を公表し、しかもそれがグラムシ夫人から提供されたと明言したのである。5月29日、ピエロの父、アンジェロ・スラッフアが上院議員マリアーノ・ダメリオによる仲介が失敗したと息子に知らせた。『土壇場で、突然、『ユマニテ』がアルカンジェリの報告書を公表したというニュースが流れさえしなければ』すべてはもっと好都合にすすんでいるように見えた、というのだ。」¹²⁾

12) Spriano (1979) に、1933 年 5 月 29 日付アンジェロからピエロへの手紙の全文英訳がある。それを読むと、アンジェロはグラムシのために直接司法に働きかけることはしていなかったが、ピエロにアドバイスをしていたことがわかる。ただ、ダメリオとの間の仲介はしていたようだ。

スラッファがグラムシとの最後の面会になった 1937 年 3 月 25 日、グラムシは共産党指導部へのメッセージをスラッファに託し、スラッファはパリの党指導部にそれを伝えた。スラッファの P. スプリアーノへの手紙によると、「グラムシが党に伝えてくれと言ったメッセージは『制憲議会のスローガンを採用するように』という簡単なものだった」（ピュシ＝グリュックスマン 1983、338 頁）。

竹村（1975）によると、スラッファがパリの党指導部に伝えたメッセージは、当時のパリの最高指導者ルッジェーロ・グリエーコがモスクワにいたトリアッティにあてた手紙に残されていて、「P（スラッファ）と話をして、友（グラムシ）が、自分の昔の憲法制定議会の考えを、今度はもっとはっきりと言いあらわしたのを知りました。『イタリアにおける人民戦線は憲法制定議会である』とかは語ったのです」と記されている。スラッファが 1969 年 12 月 18 日にスプリアーノ教授にあてた手紙には「ローマのクィンサーナにかれを訪れた最後の折に、グラムシが私に、憲法制定議会のスローガン採用の勧告を伝えるよう求めたことを、よく憶えています。そこでこれをパリで伝えましたが、グリエーコだったかドニーニだったか憶えていません。おそらくグリエーコだったでしょう」と記されている¹³⁾。

グラムシは 1937 年 4 月 27 日の早朝に死去した。タチャーナは 1937 年 5 月 12 日付のスラッファへの手紙で、グラムシの最期の様子を伝えている（カプリオッリョほか編、1982、第 4 分冊、221 - 226 頁）。

グラムシの死後、彼が獄中で書き綴ったノートはどうするかが議論されたが、結局はすべてをモスクワのジューリアのもとへ送るのが最良だという結論にいたった。獄中ノートはタチャーナによって運び出されたが、モスクワに運ぶ前に、イタリア商業銀行の金庫に保管された。イタリア商業銀行のマッティオーリはスラッファの友人で反ファシストであった。1937 年 7 月 6 日、タチャーナは獄中ノートを銀行にもちこんだ。（Spriano 1979, p.133）

13) 竹村(1975)275-276、286 頁。竹村の出典は、Paolo Spriano, *Storia del Partito comunista italiano*, Vol. 3 所収の資料とスプリアーノの記述。

むすび

ナポリターノは 1970 年代にしばしばケインブリジを訪れて、グラムシについてスラッファと語りあったという。1974 年、スラッファは手もとにあったグラムシの手紙などを、グラムシ研究所に寄贈した。現在、スラッファ・ペーパーズの C115 にはグラムシの手紙のコピーが残されている。C115 の書誌事項には「Copies of correspondence between PS, Antonio Gramsci, Tatiana Gramsci, Leonetti, Tania and Carlo Gramsci; some used in editions of Gramsci's letters with correspondence and reviews relating to such editions (216 docs) [Originals given by PS to Gramsci Institute] [1933]-75」と記載されている¹⁴⁾。「このような決意、それに先立つ苦悩は、アントニオ・グラムシと彼の党に対するスラッファの友情の最後の感情表現であった」(Napolitano 2005, p.411)。「グラムシの思い出はスラッファの魂に刻まれていた」(Ibid. p.412)。

付録

(1) スラッファとグラムシの手紙について

カプリオッリョ／フビーニ編 (大久保昭男／坂井信義訳) 『愛よ知よ永遠なれ グラムシ獄中からの手紙』1~4 (大月書店、1982 年) の底本は Sergio Caprioglio e Elsa Fubini 編の Antonio Gramsci, *Lettere dal Carcere*, (Giulio Einaudi editore, 1965) であるが、邦訳には底本刊行以降に発見された手紙も収められている。本訳書に収録されているグラムシの手紙のうちスラッファ宛は 4 通で日付は、1926 年 12 月 11 日、12 月 17 日、12 月 21 日、1927 年 1 月 2 日、すべてグラムシが逮捕・拘束されてすぐのウスティカからである。これより後に発見された手紙が *Nuove lettere di Antonio Gramsci con altre lettere di Piero Sraffa*, a cura di Antonio A. Santutti, Prefazione di Nicola

14) ここで PS は Piero Sraffa で、Tatiana Gramsci、Tania とあるのは Tatiana Schuft のことであろう。Tania は Tatiana の愛称である。Carlo Gramsci はグラムシの弟、Leonetti はイタリア共産党を除名された元政治局員であると思われる。彼は 1933 年のグラムシ救出運動にかかわっていた。

Badaloni (Editori Riuniti, 1986) に収められている。この邦訳は序文を含め、石堂ほか編 (1989) に収録されている。ここにはグラムシの手紙だけでなく、スラッファからタチャーナへの7通の手紙、その他が収められている。さらに、Piero Sraffa, *Lettere a Tania per Gramsci*, Introduzione e cura di Valentino Gerratana (Editori Riuniti, 1991) がある。これにはスラッファからタチャーナへの手紙が79通、タチャーナからスラッファへの手紙が7通、その他が収録されている。また、1974年にスラッファがグラムシ関係の手紙などをグラムシ研究所に寄贈したときの覚え書も収録されている。

(2) 1927年9月22日、ロンドンのピエロ・スラッファからパリのアンジェロ・タスカへの手紙

Rinascita (1978) に掲載されたイタリア語原文からの英訳は *New Left Review*, No.112 (1978) に掲載され、以下はその英訳からの拙訳である。同じ英訳からの向笠ハナ子氏による邦訳が『経済学批判』8号(1980年、社会評論社)にある。

友へ

あなたからの手紙が昨日届きました。私が何日も前に書いて、Zeriの編集部の人あなたに送った長い手紙をまだ受け取っていないと知って非常に驚いています。そのなかで以前のあなたの手紙への返事を書きました。すなわちラブリオーラの本を注文し、手に入ったらすぐに送るということ、そしてS.O. [*Stato Operaio*]の5号と6号を受け取ったことです。また、ポンドの切り上げに関する記事の印象を書いて、有名な『マンチェスター・ガーディアン』の記事の切り抜きを同封し、そして問題の論点を指摘しました。それがもう届いているかどうか、お知らせください……。

アントニオ[・グラムシ]についてのニュースを私はアルフォンソ[・レオネッティ]の短信で知りましたが、それは私に非常に深刻な印象を与えました。あなたは事実を知っており、著述家でありますので、この事実を正確に記述し

た手紙を私に送ってください（あるいはいろいろな新聞のために何通か）。英国の大衆に対してアピールするのです。それを私が英語に訳しますが、ことによるとこの国の風潮に合うように手を加えます。そして公表できるようにします。私ができるのは『デイリー・ヘラルド』、『ネイション』そしておそらくは『マンチェスター・ガーディアン』くらいだと思います。しかし、サルベミニの助けがあれば、もっと広く知らせることがするのは間違いありません。彼にはたくさんの知り合いとその関連での組織があります。しかしながら、明白な理由から、彼にアプローチする前に、あなたからの許可を至急得るようにしたいと思います。

手紙は次のような要素を考慮しなければなりません。a) 共産主義は当地の自由主義の風潮では非常に不評です。ですからアピールは純粹に感情に訴えるものであるべきで、事柄の政治的側面は控えめにすべきです。英国の自由主義者は、最初に動物の命に感情を顕にします。つぎに人の命に、そして最後に共産主義者の命です。b) 多くの人はずでにファシストの残虐行為を知っています。それゆえ、世論を喚起するには何か特別なものが必要です。われわれの場合、特別なものはわれわれの友人の性格というより彼の身体状態と彼が受けている取り扱いです。彼の状態については、それがデリケートな問題であることはわかっています。しかし、事柄を明白にするために「A. G. は病人です」というよりもよい方法を見つけなければなりません。あなた以外に適切な表現を見つけることができるものはいません。彼が取り扱われて来たやり方に関して言えば、「一般的な罪人のように鎖につながれた」というような文言は、すでにその効果はすべて失われています。彼が列車であちらこちらと移動させられた時間の長さや監房貨車のなかの状態を具体的に挙げることは必要です。要するに、他の囚人よりもはるかに劣悪な扱いを受けているのが、一般人よりもはるかに身体的に虚弱な男であることを明らかにすることです。彼の義姉の権利、荷物の没収など、これらも申し分ないでしょう。彼がなぜ「飢え死に」しそうであるか、正確に明確にしなければならぬでしょう。要するに、A の生命がわれわれにとって非常に大切である理由が、英国の新聞や自由主義者に真逆の効果をもつかもしいないということを、あなたは理解しなければなりません。

そして強調すべきことは、とりわけ痛ましい個人の事例の人間的な側面です。ご返事を待っています。

いまのところイタリアに戻るつもりはありません。もし可能であれば、クリスマスには戻るでしょう。S. O. のために何もできなければお許しください。こちらでの講義は2週間のうちに始まります。英語での講義は考えていた以上にずっと難しいことが分かりました。それに仕事も遅れています。

サルベミニにちょっとの時間ですが会いました。彼はS.O.を受け取りましたが、注意深く読む時間はまだありません。それでも彼はそれを見て非常に良い印象を持ちました。「それは事実と意見が論じられている、明らかに唯一の評論誌だ」と彼は言いました。彼が言っていることが、唯一のイタリアの評論誌なのか唯一の共産主義評論誌なのか、私にはわかりません。以前にも一回、彼は『オルディネ・ヌオーヴォ』の「抽象概念」を厳しく語っていました。ピエロより。

参照・引用文献

- 石堂清倫編 (1979a) 『グラムシ政治論文選集 2』 五月社。
石堂清倫編 (1979b) 『グラムシ政治論文選集 3』 五月社。
石堂清倫・いいだもも・片桐薫編 (1989) 『生きているグラムシ』 社会評論社。
片桐薫 (2006) 『グラムシ「獄中ノート」解説』 こぶし書房。
片桐薫 (2007) 『新グラムシ伝』 日本評論社。
カプリオッリョ／フビーニ編 (1982) 『愛よ知よ永遠なれ (グラムシ獄中からの手紙)』 全4分冊、大久保昭男／坂井信義訳、大月書店。
竹村英輔 (1975) 『グラムシの思想』 青木書店。
ナトーリ、アルド (1995) 『アンティゴネと囚われ人』 (上杉聰彦訳)、御茶の水書房。
ビュシ＝グリュックスマン、Ch. (1983) 『グラムシと国家』 (大津真作訳)、合同出版。
松本有一 (1992) 「ケイムブリジのスラッファァー J-P.Potier 『ピエロ・スラッファァー 異端の経済学者 (1898-1983)』 を読んで」 『経済学論究』 第46巻第1号、4月。
松本有一 (2017) 「イタリア時代のスラッファァー生い立ちと経済学者への道」 『経済学論究』 第71巻第1号、6月。

- レブレ、アウレリオ (2000) 『囚われ人アントニオ・グラムシ』 (小原耕一+森川辰文訳)、青土社。
- Naldi, Nerio (2000) “The friendship between Piero Sraffa and Antonio Gramsci in the years 1919 - 1927”, *European Journal of the History of Economic Thought*, Vol.7, No.1.
- Naldi, Nerio (2012) “Two Notes on Piero Sraffa and Antonio Gramsci”, *Cambridge Journal of Economics*, Vol.36, No.6.
- Napolitano, Giorgio (2005) “Sraffa and Gramsci; A Recollection”, *Review of Political Economy*, Vol.17, No.3, July.
- Spriano, Paolo (1979) *Antonio Gramsci and the Party: The Prison Years* (translated by John Fraser), Lawrence and Wishart.
- Sraffa, Piero (1991) *Lettere a Tania per Gramsci*, Introduzione e cura di Valentino Gerratana, Editori Riuniti.
- Potier, Jean-Pierre (1991) *Piero Sraffa - unorthodox economist (1898-1983), A biographical essay*, Routledge.
- Roncaglia, Alessandro (2009) *Piero Sraffa*, Palgrave Macmillan.